
手折られぬ花のみた夢

林 鈴太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手折られぬ花のみた夢

【Nコード】

N9369Z

【作者名】

林 鈴太郎

【あらすじ】

里が終焉のときを迎えそうだ。時は静かに、その里を見守っていた。

時は争いの絶えぬ、血こそ美しき乱世。秀でた者たちの忍の里、『芙蓉の里』は女が生まれぬ局面を迎えていた。

そうしてやっと生れ落ちた女は、美しく優秀に育った。

その身、その命を賭して生きた、女が願ったはただひとつ。叶えられることもなく、その命の終焉を迎えた女の願い、とは
。。。

どんなに強くあろうと、所詮、そこは性の壁が大きく立ちほだかる。女は女、男は男。それ以外の、何者にもすぎない。どんな運命を背負おうと、それは仮初の約束でしかない。

時はさかのぼり、はるか昔、戦いが全てをつくっていた頃の話であつた。

人知れない芙蓉の里で、女が生まれた。

芙蓉の里は、昔から名高き忍しのびの里であつた。

芙蓉の里で育つたものたちは、秀でた者が多く、それは様々な武将たちに重宝された。任務のためなら、其の命も賭すことさえ、厭わない。その勇敢さと、身のこなしの素晴らしさ。それはまさに折り紙つきであつた。

しかし、芙蓉の里では先々代から問題をひとつ抱えていた。

女子おんなこが生まれぬのである。産み役の、よく肥えた女の産むは男ばかり。やつとのもので、産んだら人の子も、全て男であつた。皮肉にも全て、優秀に育つたのだが。

それでも、そろそろ産み役も年増になつた。月ものも、間が早くなり終わりの知らせをしているようだ。本気で女の一人でも産んでくれなくては、この里はいくら優秀でも滅びてしまう。

歳を得て、重たくなつた身体をひきずって女は夜毎願つた。今宵こそ、この中に宿る命は女でありますように、と。

夜毎の願いは、やがて実を成して、叶えられた。

里に数十年ぶりの女が生れ落ちた。満月の夜、それはそれは、ふつくらと赤い子であつた。

その女は他の男たちよりも、頭一個分くらい秀でていた。忍術皆

伝は、五歳のころには終えてしまった。これも異例の早さであったものの、現当主は五歳六ヶ月で皆伝していたのでさして驚くことではなかった。

そして女は、日を追うごとに、美しく強く育った。

「お六ろくや・・・」

「はい、婆さま」

「もうお前も良い年頃・・・ひとつその命に賭けて、頼みたいことがあるのだ」

「何なりと」

低く頭を垂れて、お六ろくは跪いた。美しい漆黒の髪が、少し風に揺らいだ。

「越後の国の主が、お前に身代わりを請うている」

「身代わり？」

「越後の国の主には、娘子がいらして、それは美しく今度の縁談には出したくないらしい」

「つまり、その姫の代わりに嫁げと」

「違う、よく聞け。その嫁ぎ先の主は殺すのだ」

「殺す？」

「できないことではなかるう？」

「・・・はい」

「分かったか」

「心得ました」

「隣の屋敷で権兵衛ごんべえがある。夜伽の手解きを受けよ」

「はい」

人生において経験多き、婆の言うことは絶対である。逆らう術などないし、背けばその命すら危うい。幾ら酷な任務であっても、それは成さなければならぬ。絶対の、運命。

戸を開けると、権兵衛ごんべえは布団の傍に座り込んでいた。

この男も数ヶ月前までは、婆さまの秘蔵っ子で最前線の任務に
いていた。しかし、悲劇は突然であった。油断していたわけではな
いだろう。敵方の里の忍に薬を盛られ、その光を失った。優秀なく
のいち。その毒は、いくら毒に馴らした身体であろうと抗えぬほど
の猛毒であった。光を失っただけが奇跡のようだ。

権兵衛ごんべえは、音のする方に身体をむけた。そうして、見えない目で
私を捕え微笑んだ。

「久方ぶりだな」

「はい」

「もう、そんな歳を迎えたか・・・」

「数ヶ月前に合うたばかりではありませぬか・・・」

「その頃はまだ15であったぞ」

「・・・そうですね」

「いいか、お六ろく・・・何があっても、命だけは落すな・・・婆さ
まは情け深い・・・目を失おうと、こうして私を生かしてくれる・・・
戻って来い・・・」

「はい」

権兵衛ごんべえは優しく抱きしめたのち、お六ろくに指南を始めた。ゆっくり
と、夜の更けるのに任せて。まるで愛し合う者同士の行為にも似た、
その深い慈愛の中で。

これが最後、もしかすると、最後。

お六ろくの胸に、恐怖の波が広がる。敵方の將軍の屋敷。無論、他の
里の忍がいるだろう。潜んでいるだろう。その噂はこの里にも流れ
込んでいる。風魔の方、服部の方。優秀な忍はごまんといて、また
里もあふれている。

しかも、この里で唯一の女である私が仮に、死してしまえばこの

里も死す。

おそらく、任務から帰れば私に残されるは産み役の仕事。やがて、歳をとり婆さまのお座りになっていく高台に上ることになるのだ。この里で一番偉い、その崇高な身分に。そうして導かなくてはならない。

愛しい、愛しい、この里のために、この命を賭して。

地獄の業火もみた。死の水面上を走ったことも、敵に捻じ伏せられてその身を復讐の火に焼かれそうになったこともあった。それでも婆さまの仰せのままに、生きた。生き抜いた。そうして、最後の任務の夜、婆さまは静かに里を去り、それつきり姿を現さなかった。お六は、17を迎えた冬、婆さまの座っていたその座に就く事になった。早急にその儀式の準備が進められた。お六の為に、優秀な種を残す為に、里でも賢く秀でた男たちが集められた。

そうして、お六は、次々に子を身籠り7人の男と、3人の女を産み落とした。どの子も優秀に育った。一人残らず忍術皆伝は五歳までに習得しえた。

芙蓉の里は滅びなかったのだ。お六の、懸命な努力で。その身を賭した生き様で。里は滅びなかった。

若かった頃の、美しかったころの面影はもう、薄い。

白くはり艶のあった肌には、薄い小じわが現れだし。その苦労の末に髪はすっかり白くなってしまった。美しかった面影薄く、すっかり婆さまの座に似合う女になってしまった。

それに、ついにお六の小さな願い事は叶うことはなかった。

そうして里が、活気に溢れ、最初に産んだ女も年頃になった。次席の婆の座を務められそうな者も決まった。生まれ順は5番目であったが、特別に秀でて勘の良い娘。まだ6歳の、次女であったお糸。自分によく似ていて、どこか酷く懐かしく感じる。

もう少し、この里の行く末を見守ったら、この身はこの身できちんと片付けてしまおう。終わりも近いのか、ここ数ヶ月、身体の調子が悪い。本当に終わりが近いのだろうな、笑いを浮かべようと必死に頑張っても、こぼれるのは嗚咽ばかりであった。

そうして、一番上の息子、宗助そうすけが先代の名を受け継ぎの儀式を終えた朝に。静かにお六ろくはその重たくなつた足を山へと向けた。

忍はいつでもひとりだ。その理由は多く、語れない。

あの山で最期を迎えよう。静かに、ひとりで。この愛おしい里を思つて。果たされなかった、この想いを眠らせるように。

お慕い申しておりました、権兵衛ごんべえさま

・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9369z/>

手折られぬ花のみた夢

2011年12月29日11時50分発行